



## 相馬双葉漁業協同組合松川浦支所干潟保全協議会

### 地域の特徴

松川浦は福島県相馬市にある汽水湖で、砂州により太平洋と隔てられた南北5 km、東西3 km、面積6.06km<sup>2</sup>、最大水深約5mの細長い入り江である。湾には河川が流入しており、豊富な栄養塩が供給されることから、ヒトエグサ養殖やアサリの優良な漁場になっている。また、アマモ場も広くみられるため、様々な水産物や幼稚魚等の成育の場としても重要な水域となっている。一方、海との接続は北側にある幅約80 mの水路部分のみであるため、海水の交換率が悪いという問題点が存在する。そのため、大雨等による湾内の淡水化が長期にわたる場合があり、生物に大きな被害を及ぼすことがある。

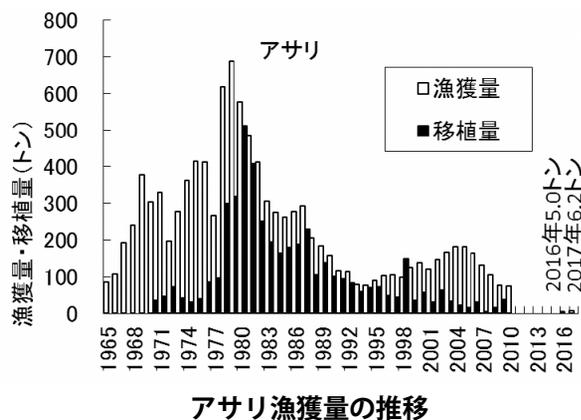


### 松川浦地区の現状と活動組織の歩み

松川浦でのアサリ漁獲量は、1979年の約700トンピークに減少し、1994年に77トンまで落ち込んだ。その後、漁獲量は一端2005年まで回復傾向を示すものの、再び減少に転じ、震災直前の2010年には過去最低の74トンとなった。そして、東日本大震災の津波によりアサリ資源はほぼ壊滅したが、2013年以降はピーク時に比べて低位水準ではあるが、大きく回復している。また、アサリ漁業は震災後自粛されていたが、2016年から試験的な操業が開始され、年間5～6トン程度水揚げされるようになった。

松川浦では1970年以降、地域外のアサリを継続的に移植してきた。

しかし、移植を行っても漁獲量は年々低下した。また、1988年以降、移植量が減少したため、それに伴い漁獲量も減少した。



※福島県水産試験場相馬支場「平成29年度水産試験場試験研究成果」引用

一方で、アサリ漁獲量の

減少が始まった1980年代後半からカキ礁がみられるようになり、それに伴うアサリの生息域の減少が懸念され、漁業者が自主的に死殻等の除去活動を開始した。その後、2004年頃からサキグロタマツメタ（以降ツメタ貝と称す）が松川浦全域に分布するようになり、食害の影響が懸念されるようになった。以降、ツメタ貝の分布は低下することなく維持されていたため、その対策として駆除活動を行うようになった。

### 相馬双葉漁業協同組合松川浦支所干潟保全協議会について

漁業者独自のカキ礁における死殻等の除去やツメタ貝の除去は、現在、平成21年に結成した「相馬双葉漁業協同組合松川浦支所干潟保全協議

会」によって実施している。

協議会の体制は、相馬双葉漁業協同組合の松川浦地区の漁業者が中心であり、漁協職員と県の普及員がサポートを行い、活動を進めている。活動の内容は、毎年会議を開き、年間計画を決定している。

### 活動内容

震災前からの課題として、カキ礁の増加、ツメタ貝の増加が挙げられており、その対策としてそれらの除去及び駆除作業を行ってきた。

震災後の課題は、震災前からのカキ礁、ツメタ貝対策に合わせ、津波の影響による底質の変化とアサリ資源量回復状況の把握が挙げられる。

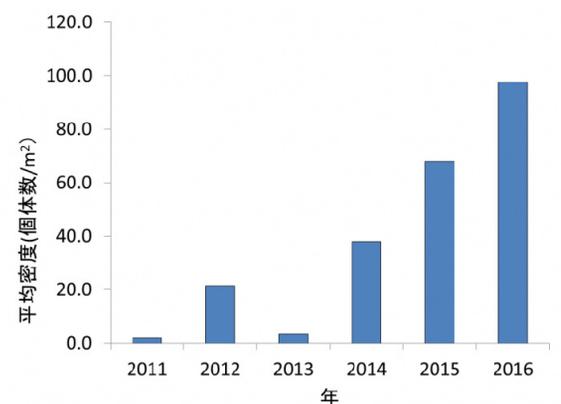
カキ礁とツメタ貝対策については、これまでと同様に駆除活動を中心に行っている。底質の変化については、震災直後は漁業者数人が同様に泥分の増加など、アサリの生育環境の低下や好適生育環境の減少を感じていた。しかし、水産試験場の調査では、震災直後は含泥率の水平分布に大きな変化がみられたが、2013年の調査時には震災以前の底質状況に戻りつつあることがわかっている。そのため、現在の活動は、漁場でのアサリの資源量推定の為、モニタリング調査を行っている。



### 成果と課題

現在、カキ礁は依然大きく形成されており、一部航路を塞ぎかけている箇所もみられる。また、ツメタ貝の駆除量も減少していないことから増加の抑止程度の効果しか得られていないのではないかと考えられる。そのため、除去及び駆除活動の効率的な方法を早急に検討する必要がある。

目標としているアサリ資源量の回復については、現在のところ、モニタリングの結果から増加傾向にあると考えられる。震災後、アサリの移



※福島県水産試験場相馬支場「平成29年度水産試験場試験研究成果」引用

植は行われておらず、現在の資源は、自然発生由来の個体群である。このことから、その年の環境条件によっては、松川浦においても再生産が行われていると考えられる。今後は他の地域からのアサリ種苗の供給がより難しい状況となるため、現在の資源を維持しつつ、資源の増加を図ることを目標としている。